青森県埋蔵文化財調査報告書　第175集

湯舟(1)・(2)遺跡

平成６年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第175集

湯舟(1)・(2)遺跡

—県営津軽中部地区広域農道整備事業に係る
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書—

平成６年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、平成５年度に津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴い、事業予定地内に所在する鰺ヶ沢町湯舟(1)・(2)遺跡の記録保存を図るため、発掘調査を実施しました。

今回の調査により、縄文時代の遺構・遺物や近世の道路等が発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、今後、埋蔵文化財の保護および活用に役立つところがあれば幸いに存じます。

最後になりますが、調査の実施および報告書の刊行にあたって、御指導、御協力いただいた関係各位に対して、ここに深く感謝の意を表する次第であります。

平成７年３月

青森県教育委員会

教育長　佐々木　透

例　　言

1　本報告書は、平成５年度に津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴い実施した鰺ヶ沢町湯舟(1)・(2)遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は、平成４年３月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に遺跡番号15047・15048として登録されている。

3　執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記してある。

4　挿図の縮尺は、図ごとに示した。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。

5　各遺構の規模については、それぞれ最大値を計測した。

6　資料の分析、鑑定については、次の方々に依頼した（順不同、敬称略）。

遺跡周辺の地形と地質	青森県立板柳高等学校教諭	山口　義伸
石器の石質鑑定	青森県埋蔵文化財調査センター主査	伊藤　昭雄

7　本書に掲載した地形図（遺跡の位置・周辺の遺跡）は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１、５万分の１の地形図を複写したものである。

8　遺構内外の堆積土の注記は、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀男　1990）を用いた。

9　出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10　発掘調査および本書の作成にあたり、次の方々から御教授・御指導いただいた（順不同、敬称略）。

小杉　　康、阿部　朝衛、服部　隆博

目　　次

序
例　言
目　次
第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項……1
第１節　調査に至る経過……1
第２節　調査要項……1
第Ⅱ章　調査方法と調査の経過……4
第１節　調査方法……4
第２節　調査の経過……4
第Ⅲ章　遺跡の環境……8
第１節　遺跡周辺の地形と地質……8
第２節　周辺の遺跡……14
第Ⅳ章　検出遺構と出土遺物……15
第１節　検出遺構と遺構内出土遺物……15
1　土坑……15
2　土器埋設遺構……15
3　炭化物土坑……17
4　道路状遺構……17
第２節　遺構外出土遺物……21
1　土器……21
2　石器……21
第Ⅴ章　まとめ……25
引用・参考文献……25

写真図版

報告書抄録

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第１節　調査に至る経過

昭和57年、青森県農林部は弘前市から西津軽郡鰺ヶ沢町に至る津軽中部地区広域営農団地農道を建設する計画を明らかにした。これを受けて、県教育委員会では計画路線に係る埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施した。その結果、弘前市管内には独孤、荼毘館、草薙、湯ヶ森、十腰内、尾上山(2)・(3)、鬼沢猿沢等の遺跡、鰺ヶ沢町管内には本遺跡を含めて４遺跡の所在が確認された。これらの埋蔵文化財包蔵地の保護のための協議を重ねたが、路線ルートの変更は困難であるとの結論に達した。そこで、造成工事着工前に記録保存のため発掘調査を実施することとなったのである。

昭和58，59年度に独孤、昭和60，61年度に荼毘館、昭和62，63年度に鰺ヶ沢町杢沢、平成元年度に尾上山(2)・(3)・鬼沢猿沢の発掘調査が行われ、各々調査報告書が刊行されている。

第２節　調査要項

１　調査目的

県営津軽中部地区広域営農団地農道整備事業の実施に先立ち、当該地域に所在する湯舟(1)・(2)遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

２　発掘調査期間

湯舟(1)遺跡　　平成５年７月５日から同年８月31日まで

湯舟(2)遺跡　　平成５年７月５日から同年８月31日まで

３　遺跡名及び所在地

湯舟(1)遺跡　　西津軽郡鰺ヶ沢町大字湯舟町字若山197番地、外

湯舟(2)遺跡　　西津軽郡鰺ヶ沢町大字湯舟町字若山220番地、外

４　調査対象面積

湯舟(1)遺跡　　2,714平方メートル

湯舟(2)遺跡　　360平方メートル

6　調査受託者

青森県教育委員会

7　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関

鰺ヶ沢町教育委員会、西北教育事務所

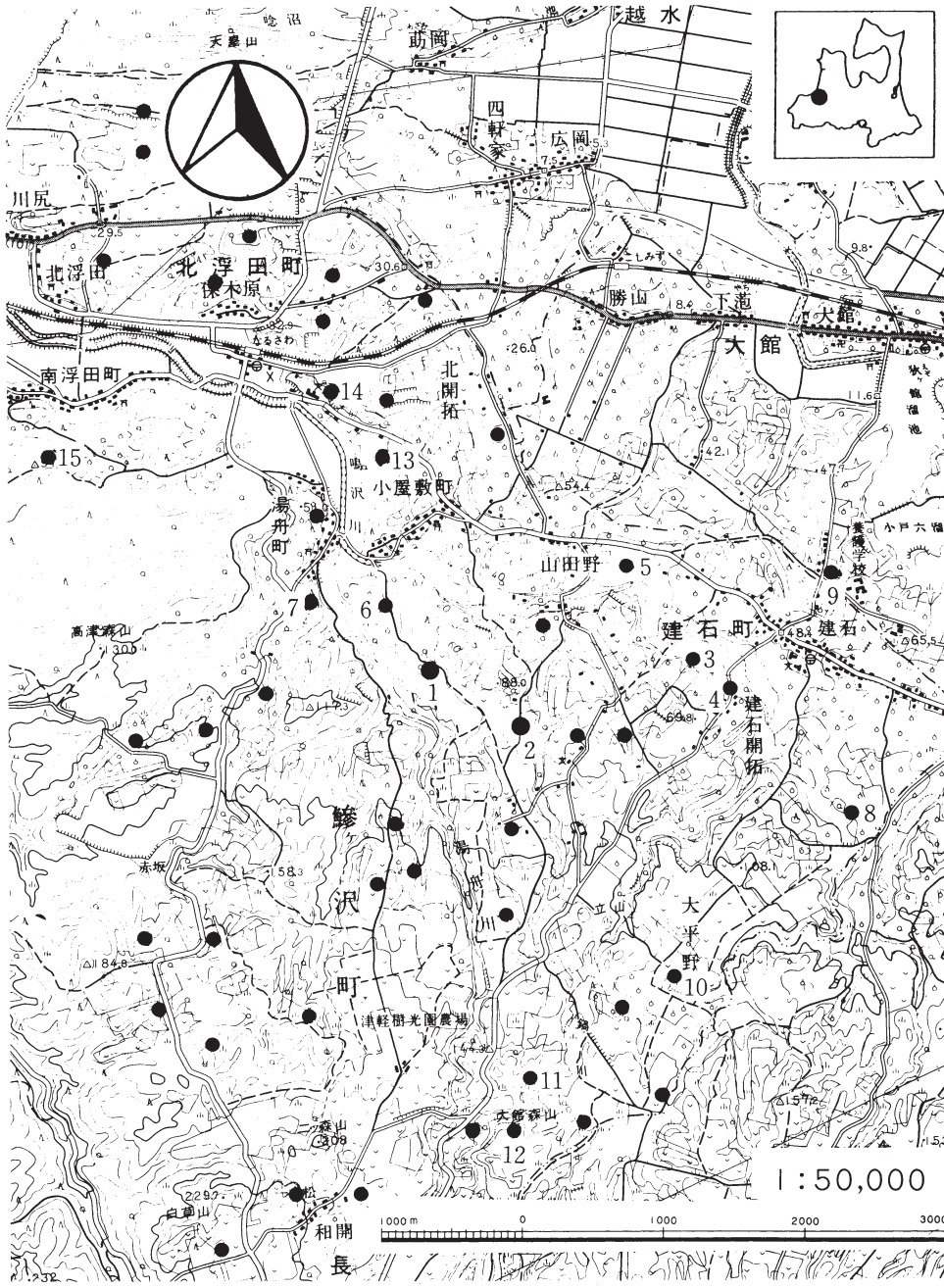
9　調査参加者

調査指導員	村越　　潔	弘前大学教授	（考古学）
調査協力員	兼平　瑞夫	鰺ヶ沢町教育委員会教育長	
調　査　員	小山　陽造	八戸工業高等専門学校教授	（分析化学）
	高島　成侑	八戸工業大学教授	（建築史）
	市川　金丸	青森県立郷土館学芸課課長補佐	（考古学）
	山口　義伸	青森県立板柳高等学校教諭	（地質学）
	赤平　智尚	青森県立柏木農業高等学校教諭	（考古学）

調査担当者　　青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課	課　　長	三浦　圭介
	主　　事	笹森　一朗
	主　　事	斎藤　　岳
	調査補助員	斎藤　　勝、堀内万里子、伊藤　弘子

（笹森　一朗）



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	湯舟(1)遺跡	縄文(前・後)	6	杢沢遺跡	縄文(前～晩),平安	11	大平野遺跡	縄文(晩)
2	湯舟(2)遺跡	縄文(中・後)	7	七尾遺跡	縄文(前)	12	大館森山遺跡	平安
3	大曲遺跡	縄文(後)	8	餅ノ沢遺跡	縄文(中・後)	13	浮橋貝塚	縄文(中・後),平安
4	鳴沢遺跡	縄文(前)	9	鶴喰(9)遺跡	縄文	14	外馬屋遺跡	平安
5	建石(1)遺跡	縄文(中・後)	10	大平(5)遺跡	縄文	15	長平館跡	中世

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章　調査方法と調査の経過

第１節　調査方法

グリッドの設定は、湯舟(1)遺跡内の道路建設用中心杭No.167を基準としてＮ－12と称し、この点を基準に磁北方向に南北方向の基準線を設定し、湯舟(2)遺跡を含めた調査区全体に４ｍ×４ｍのメッシュを組んだ。湯舟(1)遺跡と湯舟(2)遺跡の調査地点は直線距離で約200メートル程離れていたためグリッド番号は湯舟(1)遺跡では南北ラインを北から南へ１から27までの算用数字、東西ラインを西から東へアルファベットＡからＷまでを付し、湯舟(2)遺跡では別のグリッドを組み、グリッドの名称は北西隅の交点を使用することとした。

測量原点は、道路建設用地内にある工事用測量原点からレベル移動を行い、両調査区域に数箇所設置した。

調査は湯舟(1)遺跡では基準線に沿ってトレンチを設定し、遺構が検出された地点から拡幅していくこととし、湯舟(2)遺跡では１グリッド毎に数地点を掘り下げていくこととした。また、トレンチ内から出土した遺物は、その地点のグリッド名を記し、層位を確認しながら取り上げることとした。

遺構の調査は、各遺構の確認順に番号を付して精査した後、二分法・四分法等を用いた。写真撮影は、35㎜のモノクローム、カラーリバーサルフィルムの２種類のフィルムを使用し、作業の進展にともない、必要に応じて行った。

第２節　調査の経過

平成５年７月５日、湯舟(1)遺跡調査区域内の環境整備を行うと共にトレンチ設定を行い、設定区域から順次掘り下げを開始した。

調査区中央部は平坦で中世関係の遺構とも思われたが、トレンチ調査により果樹園（りんご畑）造成時に削平・盛土を受けていることが判明した。調査区南部も削平を受けており、遺物包含層の遺存状態は良くなく、遺構も土坑が２基検出されたにとどまった。

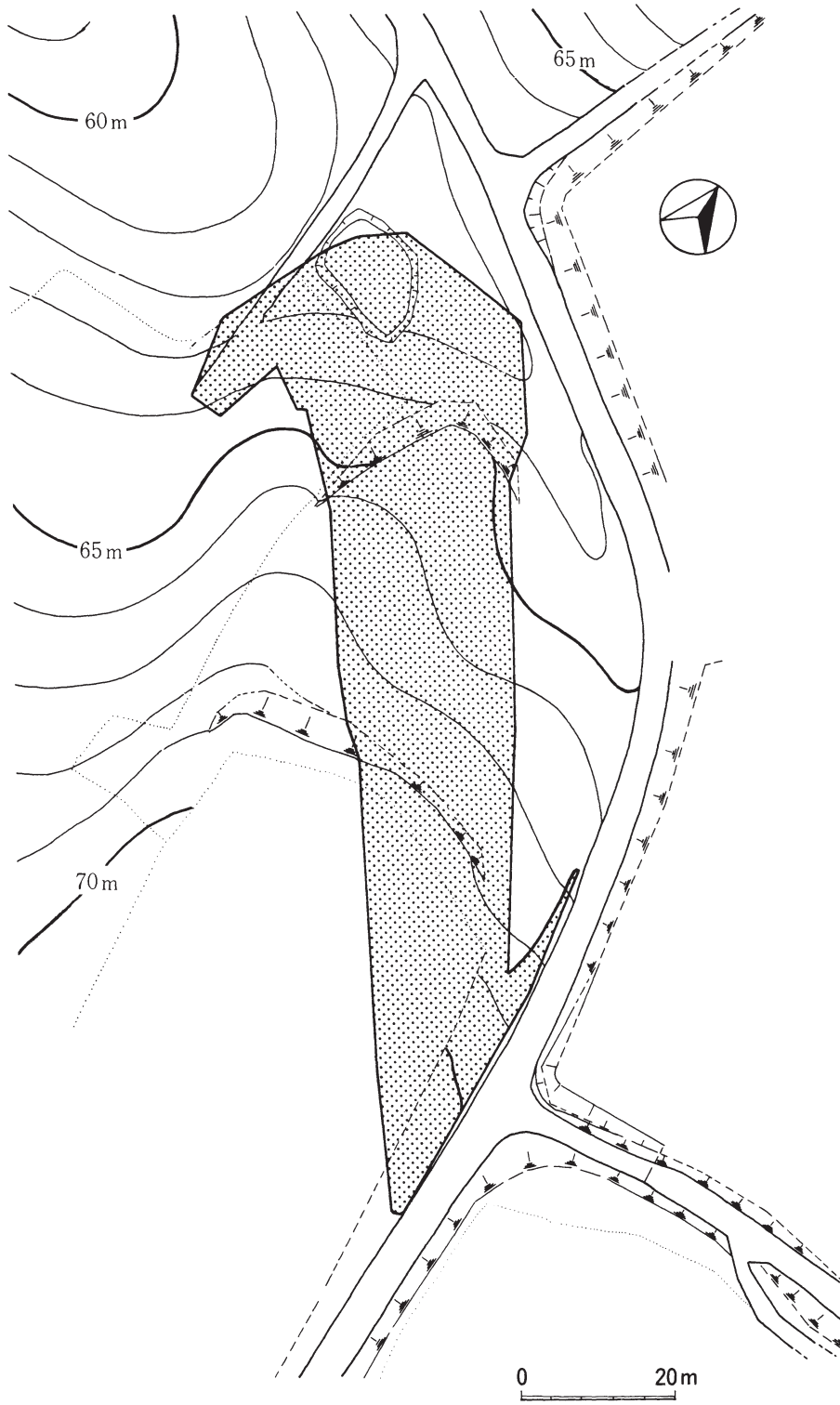
７月20日からは作業員を２班に分けて湯舟(2)遺跡のグリッド設定を行うと共に掘り下げを開始した。包含層はトレンチャー等により攪乱を受けており、遺物は縄文土器の細片が２点出土したに過ぎず、遺構も検出されなかった。８月５日、調査区の完掘全景写真を撮影し、調査を終了した。

湯舟(1)遺跡調査区北部からは第Ⅱ層精査中に道路状遺構が、第Ⅳ層精査中に、土器埋設遺構、

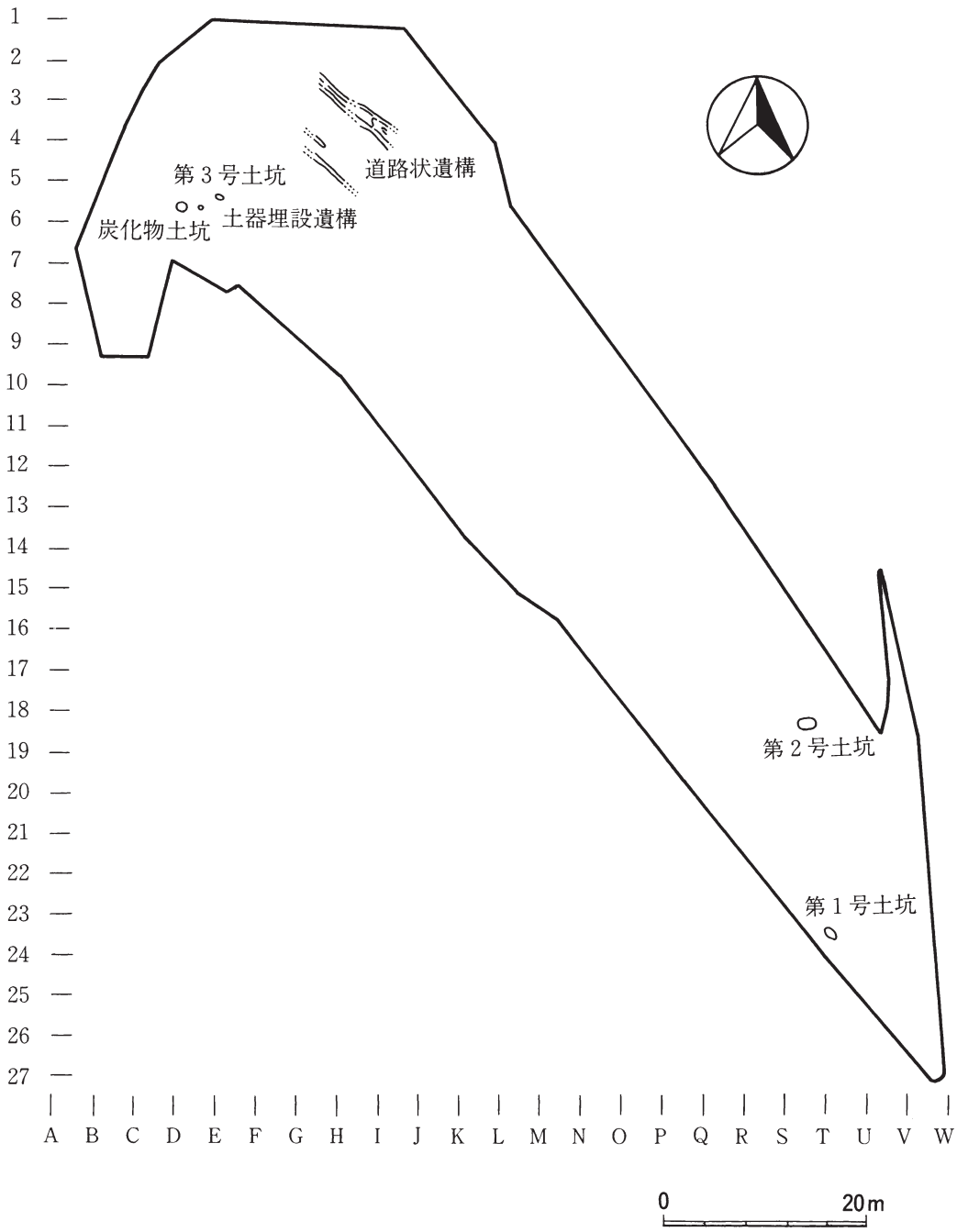
炭化物土坑が検出された。しかし、包含層中からの遺物の出土量は少なく、土器片・石器が少量出土したにすぎなかった。

8月31日、遺構の精査終了後、危険防止のため調査区域にトラロープを張り、調査の全日程を終了した。

（笹森　一朗）



第２図　湯舟(1)遺跡地形図



第３図　湯舟(1)遺跡遺構配置図

第Ⅲ章　遺跡の環境

第１節　遺跡周辺の地形と地質

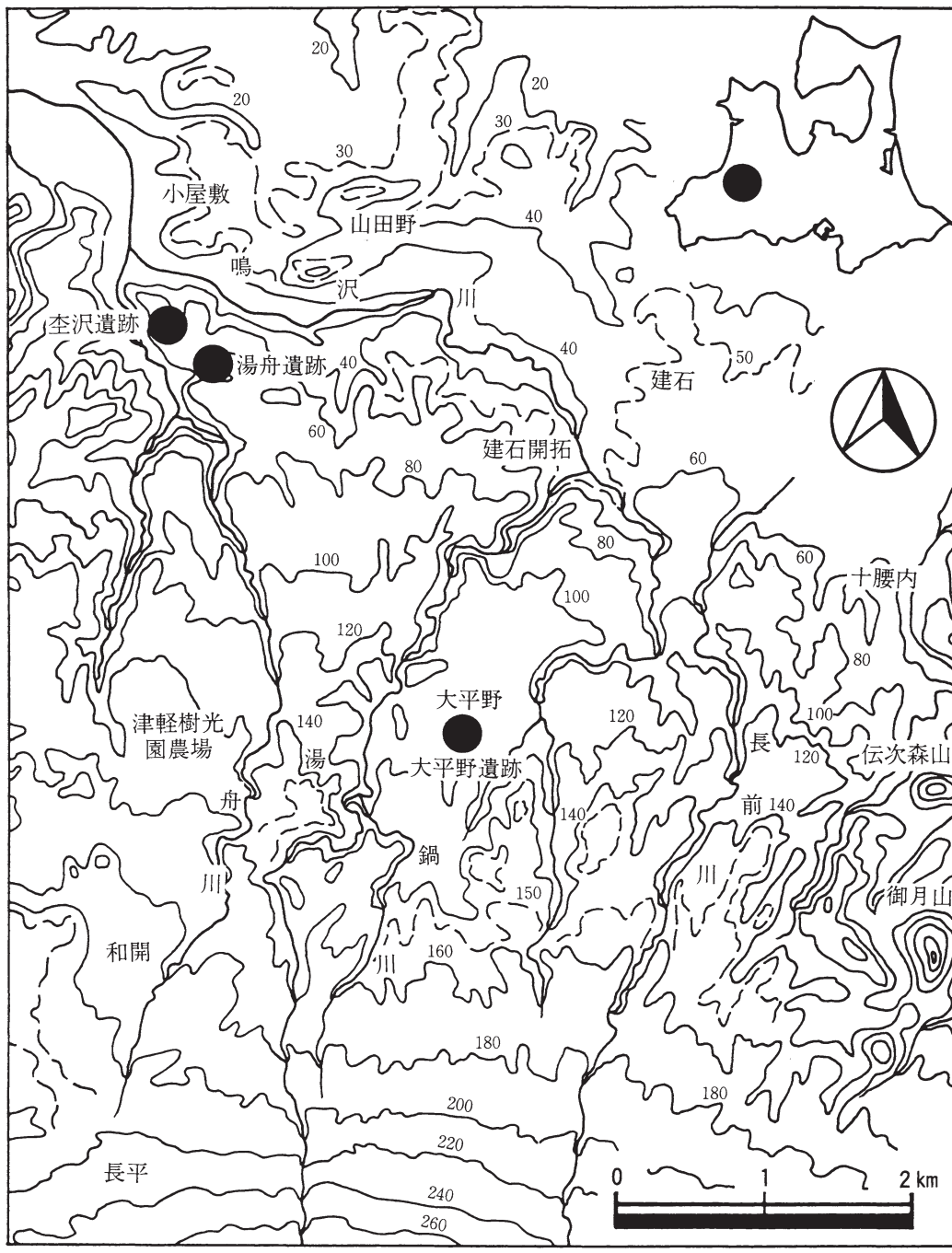
青森県立板柳高等学校教諭　山　口　義　伸

湯舟(1)及び同(2)遺跡は岩木山北麓を流れる湯舟川沿いに位置し、近くには平安時代の製鉄炉跡などが検出された杢沢遺跡が立地している。

鰺ヶ沢町湯舟にみられる主な水系としては鳴沢川があり、湯舟付近で支流である湯舟川が分流している。いずれも岩木山の放射河川である。鳴沢川はその最上流部分が大鳴沢であって、外輪山にあたる岩鬼山に源を発している。また、裾野には鍋森山（712ｍ）東方の標高600ｍ付近を扇頂部とする新期の山麓扇状地が展開し、その勾配は約100／1000とかなり急である。鳴沢川はこの扇状地のほぼ中央部を北流している。支流である湯舟川はこの扇状地の扇央部あたりから源を発していると思われ、扇端部には鰺ヶ沢町長平が位置している。鳴沢川東方には長前川が流れていて、山頂北側に位置する扇ノ金目山に源を発している。ほぼ北流して下流に築造された小戸六溜池に注いでいる。この長前川は鳴沢川に展開する扇状地と、さらに東方を流れる赤倉沢流域に展開する扇状地との接合付近を流下している。この他、山麓扇状地内を流れる数多くの浸食谷があり、平野縁辺に築造された小戸六溜池・廻堰大溜池などへ注いでいる。

岩木山北東麓の十面沢及び十腰内付近には伝次森山、御月山など円錐形をなす小丘群が点在している。いずれも比高90ｍ以下、直径500ｍ以下の小丘であって、十面沢円頂丘群と呼ばれている。この円頂丘群は輝石安山岩質の火砕岩及び溶岩からなり、「十腰内石」として採石されている。現岩木火山の噴火活動前の、いわば古岩木火山の一連の活動と考えられる（鈴木、1972)。ただ、これらの小丘群について赤倉沢から流出した泥流堆積物によって形成された泥流丘群とする見解もある（一色・大沢、1967)。

また、岩木山南麓から東麓にかけては杉沢森（148.5ｍ）・高長根山（172.0ｍ）・黄金山（168.3ｍ）などを連ねた弧状の丘陵地が展開している。この弧状の丘陵地は火山体側の相対的な沈下によって形成されたものであり、丘陵地の火山体側には断層崖が認められる（鈴木、1972)。ただ、十面沢及び十腰内以西においては段丘崖で接するような丘陵地は認められなかった。むしろ、十面沢円頂丘群とその周辺を被覆する形で分布する開析された山麓扇状地が展開している。岩木山北麓においては少なくとも新旧２つの山麓扇状地面を確認することができた。上述のように、新期山麓扇状地は古期のものより上流側にあって、勾配が大きく面の開析度が小さい。裾野の標高200ｍまでは典型的に分布している。標高200ｍ以下にあっては鳴沢川以東



第４図　遺跡周辺の等高線図

の大平野付近及び湯舟川以西の長平・和開そして津軽樹光園農場など各流域に帯状に分布している。これに対して、古期火山扇状地はその上流端が新期のものに被覆されているためにほぼ連続して下流側に位置していて、標高200m以下の分布が主である。新期山麓扇状地内に小丘状に点在したり湯舟川－鍋川間での河間丘陵の分布を示したりなど、扇状地面の側方浸食が著しく開析度がきわめて大きい。面の勾配は新期のものよりかなり小さいものと思われる。

ところで、図1の等高線図によると、山腹の標高600mを扇頂部とする扇状地の地形は標高200m付近までは等高線がほぼ等間隔で分布している。鳴沢川以南の標高約60m付近までは等高線の入り組みが大きく、特に津軽樹光園農場以西、湯舟川－鳴沢川間及び大平野以東では入り組みが目立ちかなり開析されているのが読み取れる。これに対して、湯舟川以西の津軽樹光園農場付近（標高180～100m）及び鳴沢川以東の大平野付近（140～100m）は等高線の間隔が広くきわめて平坦であることがわかる。なお、長前川以東には比高90m以下の円錐形の等高線の発達が認められる。一方、鳴沢川以北においては山田野付近で標高60mほどの小丘状になっているが、ほかは標高40～20mのやや起伏する地形であることがうかがわれる。

図2は、遺跡周辺の地形分類図を示している。およそ湯舟川－長前川間には新旧2つの山麓扇状地が展開している。特に、湯舟川流域及び鳴沢川流域には新期山麓扇状地が幅1km未満の帯状の分布を示している。扇状地面には数多くの溜め池が築造されて水田及び畑・牧草地として土地利用されている。この新期の山麓扇状地面は上部火山灰層（後述の基本層序Ⅳ層）に覆われていて、Ⅳ層直下には暗色帯が付随している。この扇状地の構成層として、大平野(5)遺跡でも確認したが、暗色帯下には酸化した細粒～中粒砂をレンズ状に含む黄灰色あるいは青灰色粘土等が認められる。湯舟川－鳴沢川間には開析された古期の山麓扇状地が分布し、一部は大館森山のように小丘化している。この丘陵化した古期山麓扇状地は、本遺跡の500m程南東方に位置する丘陵地（標高88.0mの三角点付近）及び和開（標高190m）などにおいて確認したところでは、亜角礫～亜円礫（安山岩質）を包含する厚さ10m以上の凝灰質砂礫及び凝灰質粘土等の堆積物で構成され、その扇状地性堆積物が赤褐色ハードローム（厚さ2～3m）から成る中部火山灰層に被覆されている。なお、湯舟川西方の小谷以西では基盤岩を主とする山地及び丘陵地が分布している。一方、鳴沢川以北では古期山麓扇状地と同時期かそれ以降に形成されたと思われる山田野段丘（中位段丘に相当する）が発達している。山田野段丘面は中部火山灰層に覆われ、下位には凝灰質粘土及び同質砂などが堆積している。ただ、外洋に面したところでは非火山性の成層した砂層（砂鉄層を含む）及び砂礫層などが堆積している。

本遺跡は鰺ヶ沢町湯舟から南東方へ約1km程離れた丘陵地に位置している。湯舟(1)遺跡の調査区域は標高62～70mであって、この区域の北端E－1グリッド付近には小谷が流れ、この小谷に向かう緩やかな傾斜地に立地している。また、同(2)遺跡の調査区域は標高75～80mであっ

第５図　遺跡周辺の地形分類図

て、丘陵地の稜線部に立地している。西方には北流する湯舟川があって、両岸には約40mの比高差のある急崖が認められる。なお、この丘陵地は上述のように開析された古期の山麓扇状地であって、遺跡付近はかなり起伏に富んだ地形となっている。この扇状地面に谷頭をもつ小谷の流域には、湯舟(1)遺跡の調査区域北端にみられるように小規模ながら新期山麓扇状地相当面が展開している。

次に、調査区域内の基本層序について記述する（図６）。

Ⅰ層　黒褐色土（厚さ10cm）　耕作土であって、かたさはあるが締まりに欠け脆い。湯舟(1)遺跡の調査区域北端部に位置する傾斜地においては、本層上位にロームブロックからなる人為的な盛り土が約2mの厚さで確認できた。全般的にみて、本層は下位層を含めた人為的な攪乱層であって、ロームブロックなどの混入物が多い。

Ⅱ層　黒色腐植質土（10～20cm）　攪乱により局部的に分布するのみである。粘性及び湿性があり、かたくやや締まっている。

Ⅲ層　暗褐色土（10～30cm）　粘性及び湿性があり、かたく締まっている。浮石・ロームの粒子及びブロックの混入状況によりⅢａ層とⅢｂ層とに区分できる。上部のⅢａ層は粒子状の混入が目立ち、やや黒褐色気味で色調が暗い。下部のⅢｂ層はブロック状の混入が目立ち、上部より色調が明るくローム質となっている。

Ⅳ層　明黄褐色ラピリ質浮石（約20cm）　緻密堅固である。上部火山灰層に相当する。

Ⅴ層　淡灰褐色ローム（10～15cm）Ⅳ層直下に堆積する暗色帯であって非常にかたく締まっている。クラックの発達がみられる。本層以下については基本的には中部火山灰層に相当する赤褐色ハードロームが堆積する。ただ、本遺跡東方の三角点（標高88.0m）付近の露頭にて確認したところでは、ローム層中の暗色帯には亜角礫～亜円礫（安山岩・シルト岩などで、最大で拳大の大きさ）が含まれ、多少砂混じりの粘土質ロームに変化していることから、ローム層の堆積間隙時にも土石流などが繰り返し発生していたものと思われる。

参考・引用文献

大　沢　　穠　1961　5万分の１地質図幅「弘前」（青森－第28号）同説明書　地質調査所

一色直記・大沢　穠　1967　岩木火山北東麓の泥流丘群　火山．Vol．2．No12－3

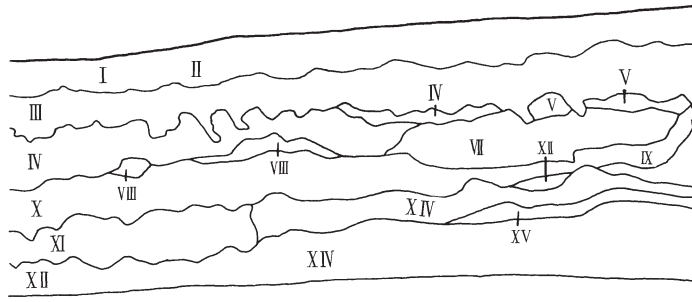
中　川　久　夫　1972　青森県の第四系　青森県の地質　青森県

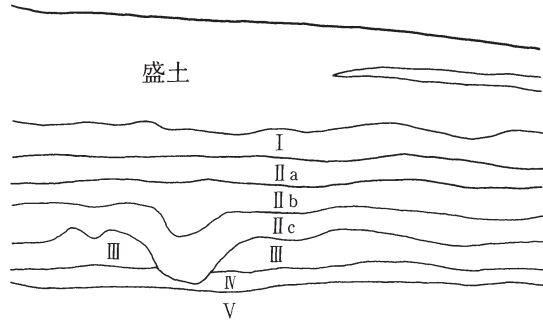
鈴　木　隆　介　1972　岩木山の変位　地理学評論45号

青森県教育委員会　1989　杢沢遺跡　県埋文報第130号

弘前市教育委員会　1991　砂沢遺跡発掘調査報告書―本文編―

青森県教育委員会　1992　鳴沢遺跡・鶴喰(9)遺跡　県埋文報第142号





第６図　湯舟遺跡基本土層図

第２節　周辺の遺跡

本遺跡の周辺には岩木山の山裾に拡がる丘陵地が拡がっており、山林に囲まれた畑地などでは表面採集により数多くの遺跡の所在が確認されている。

大曲遺跡は、縄文中期末葉の張り出しを持つ竪穴住居跡、配石遺構等が検出された。中期末葉～後期初頭、晩期の土器・石器が出土している。

鳴沢遺跡は、縄文時代前期末葉の埋設土器遺構、集石遺構等が検出された。埋設土器遺構群は、当時の墓地と考えられ、縄文時代の葬法を知る上での貴重な資料である。包含層より円筒下層式土器、弥生式土器、土製品、石製品等が出土している。

建石(1)遺跡は、縄文時代中・後期の遺物散布地である。

杢沢遺跡は、縄文時代前期前葉の大規模な集落の存在を推定させる遺物の廃棄ブロックが、平安時代では、竪穴住居跡、全国有数の規模の精錬炉跡の他、精錬関連遺構が検出されている。

七尾遺跡は、縄文時代前期の遺物散布地である。

餅ノ沢遺跡は、縄文時代中～後期の比較的大型の石棺墓が２基検出された。周辺には更に多くの石棺墓の存在が予想される。

鶴喰(9)遺跡は、縄文早・中・後期の土器片と、平安時代の土師器が出土した。遺構は検出されなかった。

大平(5)遺跡は、平成６年度に調査が行われ、縄文時代の土坑、平安時代の炭窯が検出された。縄文時代中～後期の土器、土師器、旧陸軍の演習によるものと考えられる小銃弾が出土している。

大平野遺跡は、縄文時代晩期の竪穴住居、半月形の炉跡、配石遺構等、また平安時代の遺構として精錬炉が検出されている。

大館森山遺跡は、平安時代の竪穴住居跡、半円状の張り出しを有する精錬炉が検出された。大規模な精錬遺構と思われる。羽口、鉄滓、土師器、擦文土器等が出土している。

浮橋貝塚は、縄文前期の貝塚、竪穴住居跡が検出された。貝塚は99％強を淡水性のヤマトシジミが占め、他に魚骨・獣骨・骨角器などが出土している。また、精錬に関すると思われる平安時代の竪穴住居跡および鉄器、羽口等の遺物が出土している。

外馬屋遺跡は、平安時代の竪穴住居跡が検出された。羽口、鉄滓等の精錬関連遺物が出土しており、付近に精錬遺跡が多い点から、精錬に関する遺構だと思われる。

長平館跡は中世の館跡と考えられている。

（田澤　賢治）

第Ⅳ章　検出遺構と出土遺物

第１節　検出遺構と遺構内出土遺物

今回の調査では、湯舟(1)遺跡からは土坑３基、土器埋設遺構１基、炭化物土坑１基、道路状遺構が検出され、湯舟(2)遺跡からは遺構は検出されなかった。

１　土　坑

第１号土坑（第７図・図版１）

［位　　置］調査区南部、Ｓ・Ｔ－23グリッドに位置する。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、長軸100㎝、短軸58㎝、深さ15㎝を計測する。

［壁・底面］壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

［堆　積　土］堆積土は３層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

［出土遺物］遺物は出土していない。

第２号土坑（第７図・図版１）

［位　　置］調査区南部、Ｓ－18グリッドに位置する。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、長軸200㎝、短軸120㎝、深さ27㎝を計測する。

［壁・底面］壁は底面からやや急に立ち上がる。底面は多少凹凸している。

［堆　積　土］堆積土は３層に分層され、自然堆積の様相を呈する。

［出土遺物］遺物は出土していない。

第３号土坑（第７図・図版１）

［位　　置］調査区北部、Ｅ－５グリッドに位置する。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、長軸80㎝、短軸42㎝、深さ27㎝を計測する。

［壁・底面］壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

［堆　積　土］堆積土は２層に分層された。人為的に埋め戻された可能性が高い。

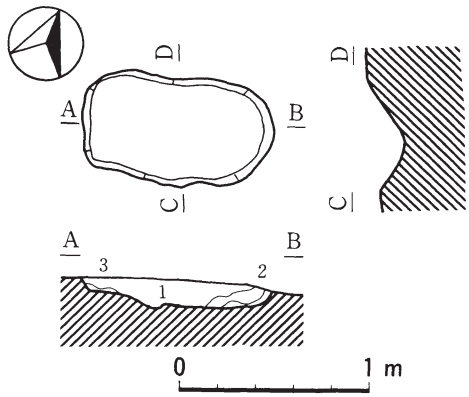
［出土遺物］遺物は礫が１点出土している。

２　土器埋設遺構

第１号土器埋設遺構（第８図・図版２）

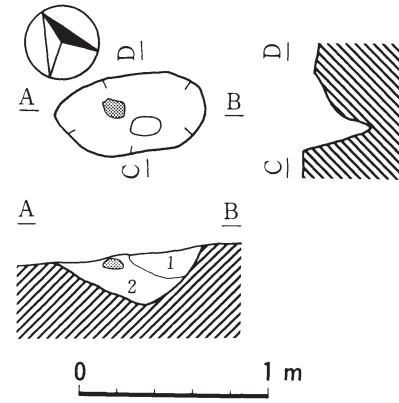
［位　　置］調査区北部、Ｄ－５グリッドに位置する。

［確　　認］第Ⅳ層精査中に直立する土器の口縁部を確認した。掘り込みは明確には確認で



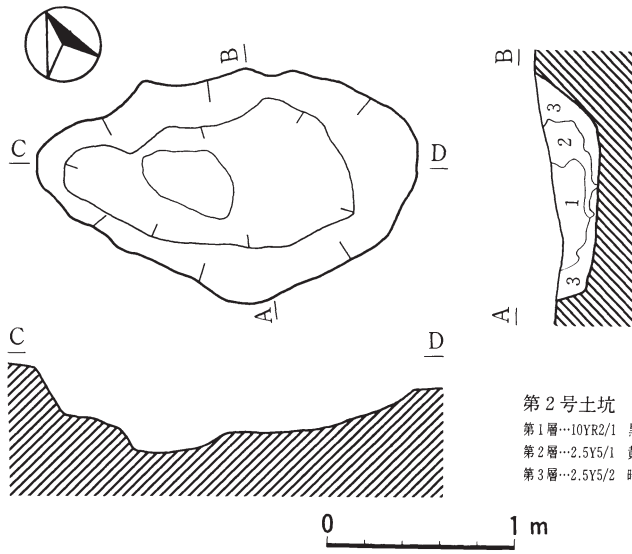
第１号土坑

第１層…10YR3/1　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　炭化物少量含む
第２層…10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　ローム粒子少量含む
第３層…2.5Y8/8　黄色土　粘性なし　しまりあり　ローム主体



第３号土坑

第１層…10YR1.7/1　黒色土　シント質　半湿　粘性中程度　しまりふつう
ロームブロック(φ５～５㎝大)、ローム粒子を多量に含む
第２層…10YR1.7/1　黒色土　シント質　半湿　粘性中程度　しまりふつう
ロームブロック（φ５～１㎝大）を少量含む



第２号土坑

第１層…10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　炭化物多量、焼土粒子少量含む
第２層…2.5Y5/1　黄灰色土　粘性なし　しまりあり　ローム粒子多量に含む
第３層…2.5Y5/2　暗黄灰色土　粘性なし　しまりあり　砂粒・炭化物少量含む

第７図　第１・２・３号土坑

きなかった。

[堆　積　土] 土器内覆土は２層に分層された炭化物が少量検出されている。

[遺　　物] （第８図１）は、縄文時代中期末葉の所産と思われる深鉢形土器で、胴部全面に単節の斜縄文を施文する。胎土は砂粒・小石を多量に含むが、焼成は良好である。土器表面には少量の煤が付着している。

（笹森　一朗）

3　炭化物土坑

第１号炭化物土坑（第９図・図版２）

[位　　置] Ｄ－５グリッドに位置する。

[確　　認] 第Ⅱ層中において炭化材及び粉状の炭化物の集積地点として確認した。

[平面形・規模] 不整円形。浅い掘り込みの中に炭化物が密集する。掘り込みは長軸118cmで短軸108cmであり壁高は10cmである。

ただ、残存壁高がわずかであること、その立ち上がりがゆるやかであることから、自然の窪地である可能性が全くないわけではない。

[堆　積　土] 落ち込みの中は、１層（炭化材及び粉状の炭化物）のみである。なお、坑底の下は赤っぽい黒褐色土で焼土を含み、炭化材の生成に伴い焼けたものと判断された。

[出 土 遺 物] 縄文土器片が２点出土した。

4　道路状遺構

道路状遺構（第10図・図版２）

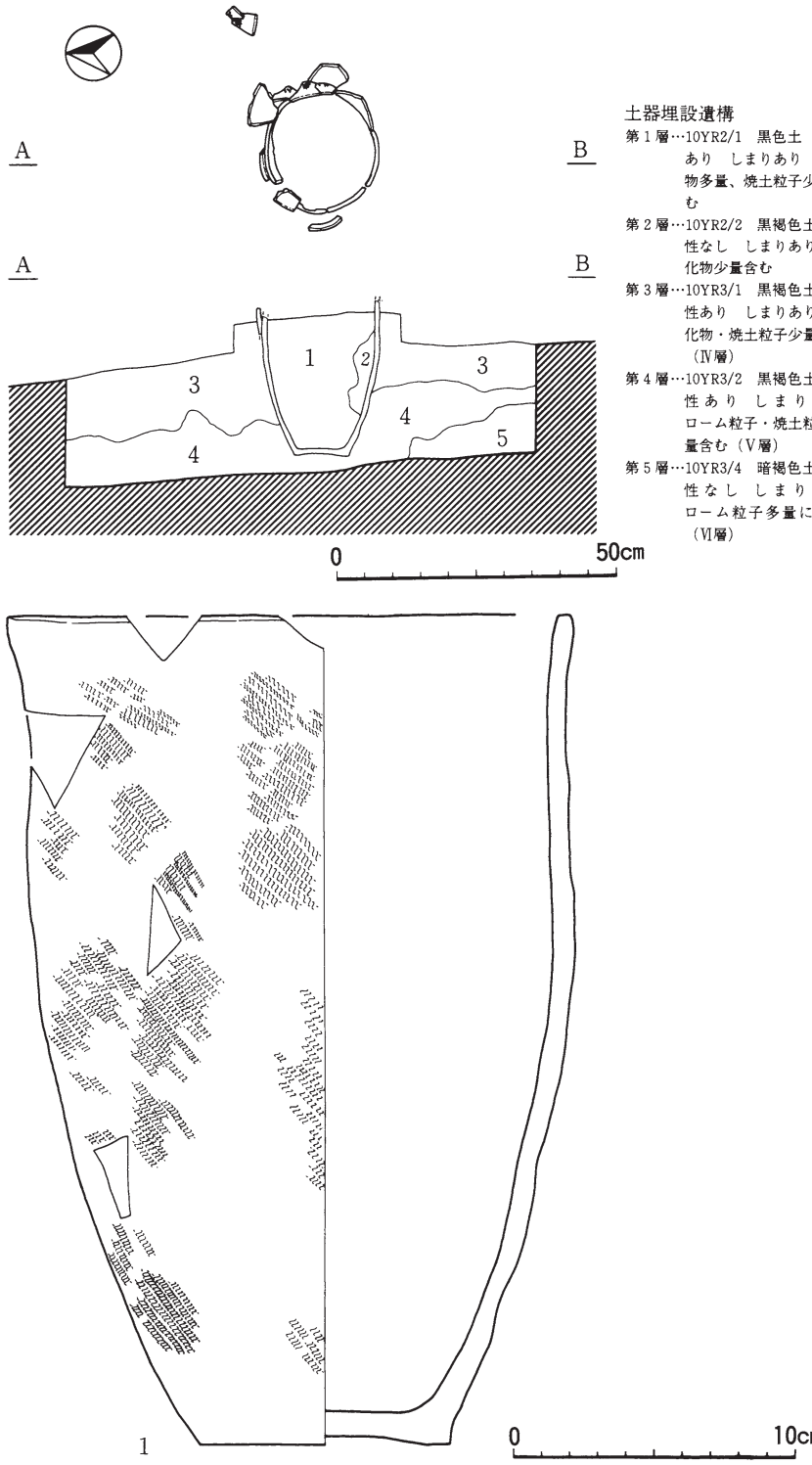
[位　　置] Ｇ－２～Ｇ－５及びＨ－６～Ｉ－４グリッドに位置する。

[確　　認] 第Ⅰ層下部で堅くしまった土が露出したことにより確認した。堅い部分は、細砂を含むものが多いこと、堅い部分の上部が細砂層となっているものがあること（露出し雨に洗われていた状況が想定される）から道路としてのありようが想定され、道路状遺構とした。

堅い部分は、レベル差を持つものがあり、また重なりをもつものがある。

重なりをもつものについては、スクリーントーンの表示を変えて表現した。重なりの間が細砂層となっているため、かさぶたが剝がれるようにきれいに現れた。

[平面形・規模] 南西から北東へ、数条みられた。堅さや残存状況もまちまちである。遺構は堅



土器埋設遺構

第１層…10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　炭化物多量、焼土粒子少量含む

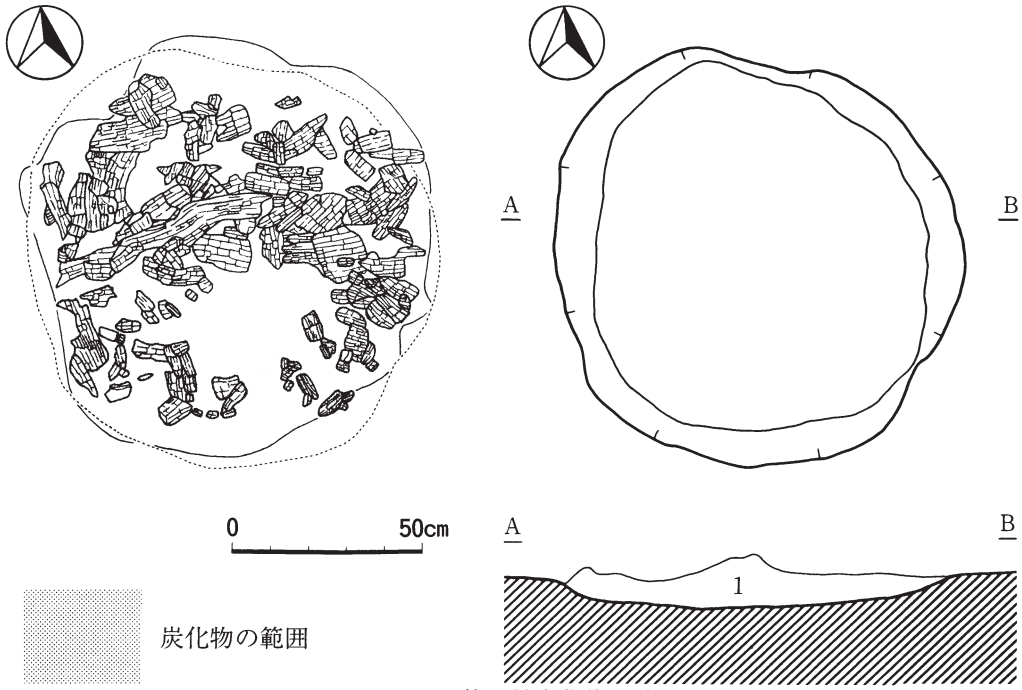
第２層…10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　炭化物少量含む

第３層…10YR3/1　黒褐色土　粘性あり　しまりあり　炭化物・焼土粒子少量含む（Ⅳ層）

第４層…10YR3/2　黒褐色土　粘性あり　しまりあり　ローム粒子・焼土粒子少量含む（Ⅴ層）

第５層…10YR3/4　暗褐色土　粘性なし　しまりあり　ローム粒子多量に含む（Ⅵ層）

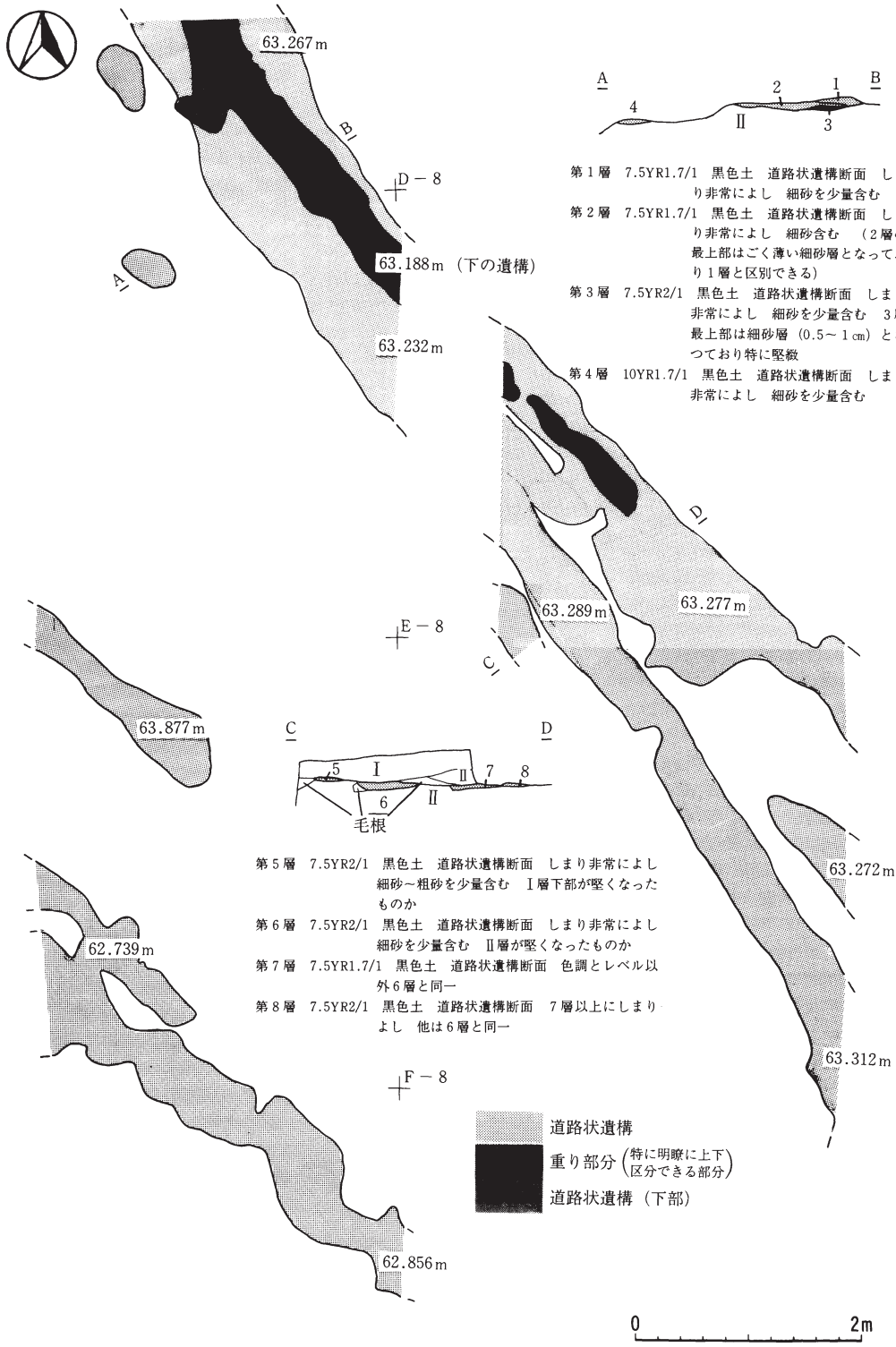
第８図　土器埋設遺構



第１号炭化物土坑

第１層…N1.5/0　黒色土　炭化材及び粉状の炭化物

第９図　第１号炭化物土坑


63.267m
B
D－8
63.188m（下の遺構）
A
63.232m
A
B
4
2
1
Ⅱ
3
第１層　7.5YR1.7/1　黒色土　道路状遺構断面　しまり非常によし　細砂を少量含む
第２層　7.5YR1.7/1　黒色土　道路状遺構断面　しまり非常によし　細砂含む　（２層の最上部はごく薄い細砂層となっており１層と区別できる）
第３層　7.5YR2/1　黒色土　道路状遺構断面　しまり非常によし　細砂を少量含む　３層最上部は細砂層（0.5～１cm）となつており特に堅緻
第４層　10YR1.7/1　黒色土　道路状遺構断面　しまり非常によし　細砂を少量含む
D
63.289m
63.277m
E－8
C
63.877m
C
D
5
Ⅰ
Ⅱ
7
8
6
Ⅱ
毛根
第５層　7.5YR2/1　黒色土　道路状遺構断面　しまり非常によし　細砂～粗砂を少量含む　Ⅰ層下部が堅くなったものか
第６層　7.5YR2/1　黒色土　道路状遺構断面　しまり非常によし　細砂を少量含む　Ⅱ層が堅くなったものか
第７層　7.5YR1.7/1　黒色土　道路状遺構断面　色調とレベル以外６層と同一
第８層　7.5YR2/1　黒色土　道路状遺構断面　７層以上にしまりよし　他は６層と同一
63.272m
62.739m
F－8
63.312m
道路状遺構
重り部分（特に明瞭に上下区分できる部分）
道路状遺構（下部）
62.856m
0
2m

第10図　道路状遺構

さにより認定したが、南側の２本は、堅さが比較的弱かった。

（斎藤　　岳）

第２節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、段ボール箱にして２箱にすぎなかった。調査区北側からの出土が大部分であるが包含層中からの出土量は少なく、大部分が盛り土の中からで、縄文時代早・中・後期の土器片、石器、弥生時代中期の土器片が出土している。また、湯舟(2)遺跡からは縄文土器の細片が２点出土しているが図示し得るような遺物ではなかった。

１　土　器（第11図・図版３）

１は尖底土器の底部付近と思われる。貝殻腹縁による方形区画内に縦位の貝殻腹縁文を施文している。２～５は同一個体と思われる口縁部で波状を呈する。口唇部に撚糸圧痕文を施文する。胎土には砂粒を多量に含み、化粧土の剝落が著しい。６～８も同一個体と思われる。口唇部及び粘土紐貼付けによる隆起線文に撚糸圧痕文を施文する。隆起線文によって区画された内部には刺突文が施文される。９・10・11・12は６～８と同一個体と思われる口頸部及び胴部片。隆起線文によって区画された内部には刺突文が施文され、隆起線文下部には羽状縄文が施文される。13・14は口唇部に並行する粘土紐に直・斜行する粘土紐を貼付けている。同一個体と思われ、粘土紐上には箆状工具による刻み目を施文する。15は折り返し口縁を呈し、口唇部及び口縁部には波状の細い粘土紐が貼付けられている。19・20は口唇部に並行する粘土紐に斜行する粘土紐を貼付けているが、刻み目は施文されない。16・17・18は胴部片。斜縄文施文後に粘土紐を貼付けている。23・25も胴部片。細い粘土紐による隆線文によって区画された内部には刺突文が施文される。26は胴部片。地文無文に沈線文を施文する。27・28は台付浅鉢形土器の口縁部片。

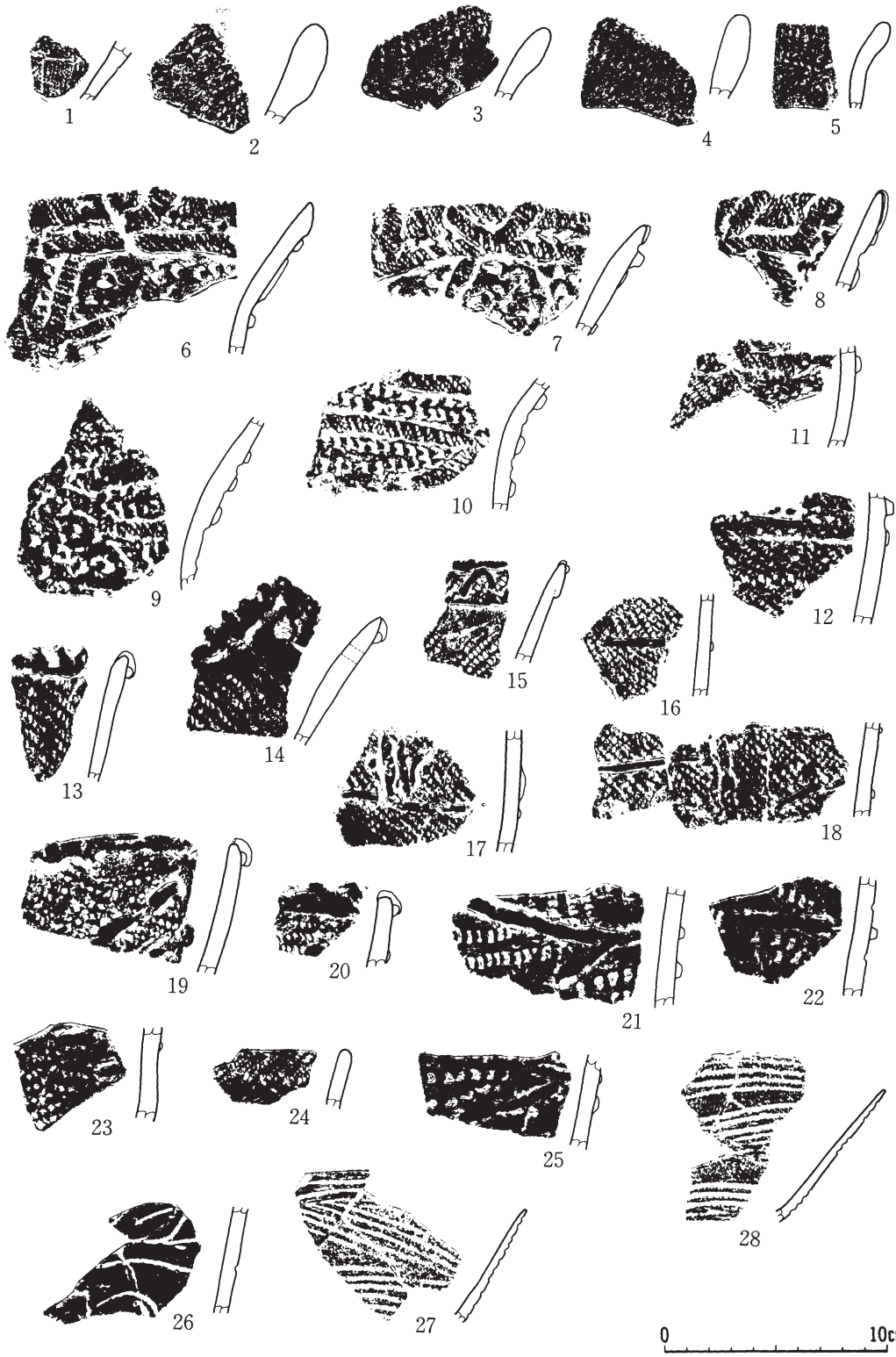
（笹森　一朗）

２　石　器（第12・13図・図版４）

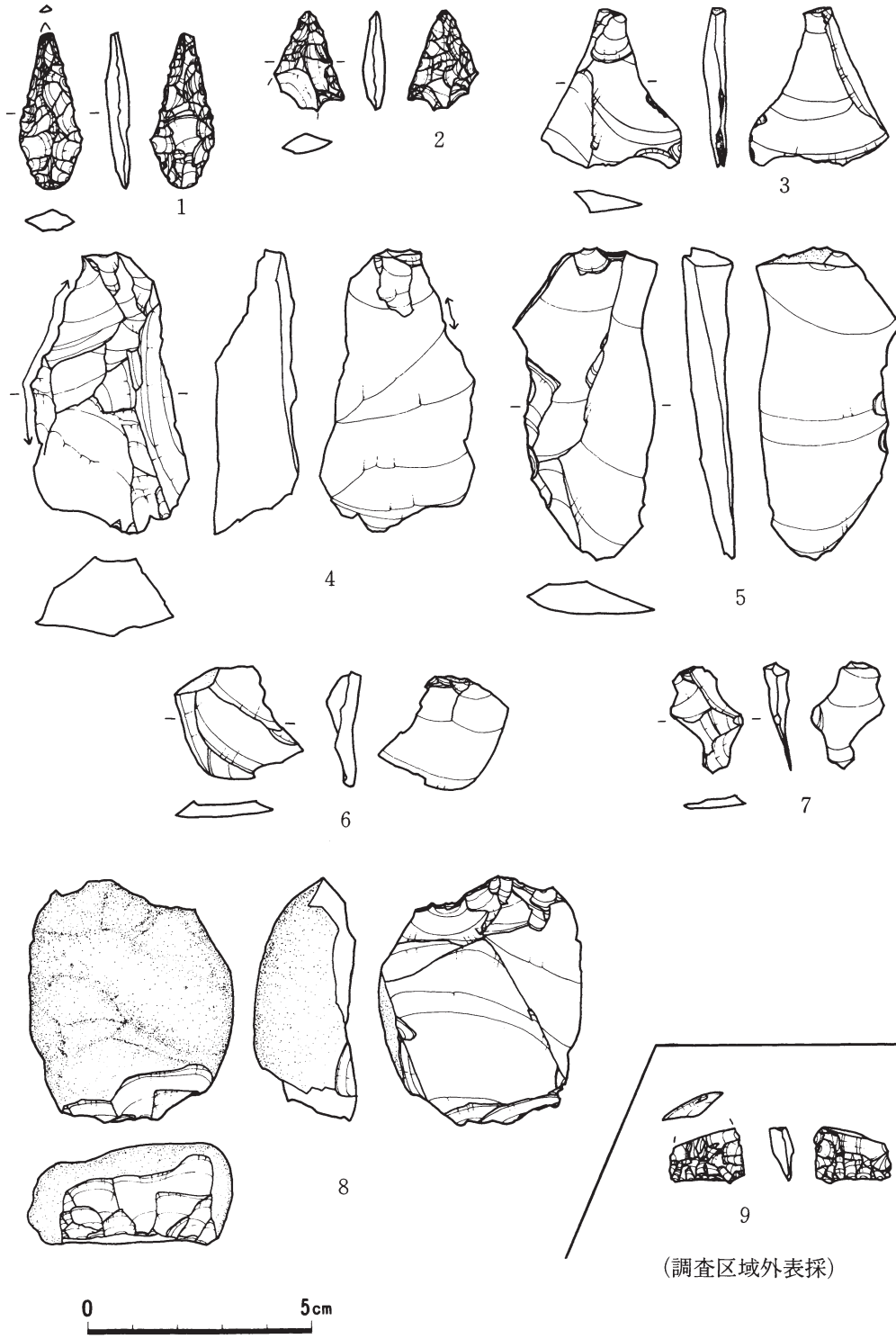
石器はすべて遺構外からの出土である。石鏃２点、二次加工のある剝片２点、微細な剝離痕のある剝片１点、剝片７点、石核１点、半円状偏平打製石器１点、凹石１点の計15点である(8)は礫器とするには刃部にあたる部分にツブレがなく石核とした)。

他に調査区域外（調査区中央から約100ｍ北北西）から、黒曜石製の石鏃が１点(9)表面採集されている。

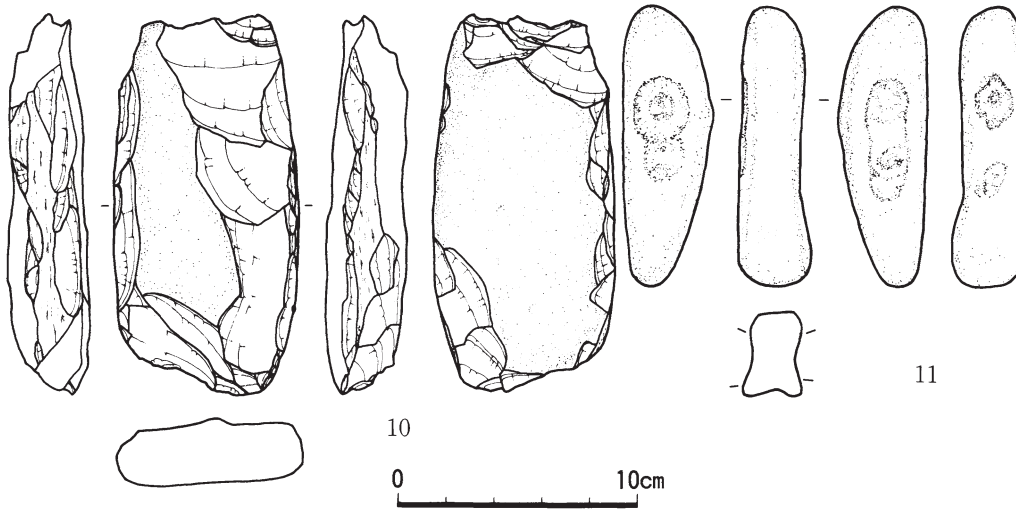
（斎藤　　岳）



第11図　遺構外出土遺物土器



第12図　遺構外出土遺物　石器(1)



第13図　遺構外出土遺物　石器(2)

番号	分　類	出土地点	層位	大きさ（cm）	重量（g）	石　質	備　考
1	石　鏃	G－4	Ⅱ	(3.6)×1.4×0.5	(1.9)	珪質頁岩	
2	〃	D－4	Ⅱ	(2.3)×(1.6)×0.5	(1.3)	〃	
3	二次加工のある剥片	G－4	Ⅰ～Ⅱ	3.7×3.2×0.6	4.1	〃	
4	微細な剥離痕のある剥片	E－10	Ⅰ～Ⅲ	6.4×3.5×1.9	34.8	流紋岩	
5	剥　片	3　T		7.1×3.3×1.1	15.7	玉髄質珪質頁岩	
6	〃	G－3	Ⅰ～Ⅱ	2.6×2.9×0.7	2.9	珪質頁岩	
7	〃	2　T		2.4×1.6×0.6	0.9	〃	
8	石　核	E－7	Ⅰ	5.5×4.5×2.3	68.1	〃	礫器の可能性有
9	石　鏃	調査区外	表採	1.3×1.7×0.4	0.8	黒曜石	
10	半円状偏平打製石器	E－7	Ⅰ	15.8×7.7×3.3	509.0	凝灰岩	
11	凹　石			11.8×3.7×3.0	129.5	泥　岩	

第１表　石器観察表

第Ⅴ章　ま　と　め

湯舟(1)遺跡は、林檎園造成時にかなり削平・盛り土を受けており、調査区南部では遺物はほとんど出土しなかった。縄文時代の遺物の出土量は、調査区北部に集中している。しかし、包含層中からの遺物出土量は少なく、ほとんどは盛り土内からの出土で、大部分は流れ込みによるものと思われ、縄文時代早・中・後期、弥生時代中期に属する土器片が散漫に出土している。石器は主として調査区西側から出土しているが、土器同様散漫な出土であり、かつ同一固体のものが無いので、互いの関連性は薄いものと判断されよう。

本遺跡は、埋設土器遺構の検出されたーグリッド付近を除いては、生活要素の薄い遺跡である。しかし、目的的剝とは言えないような剝片（第12図６・７）や石核が出土しており、剝片剝離がキャンプサイト的な場にあっても必要に応じて行われたことを示しているだろう。また、谷頭にあたるＤ・Ｇ－４グリッドから石鏃が各１点出土しており、狩猟場としてのありようが想像されるが、谷に面した西側の緩斜面への生活域の拡がりも考えられる。道路状遺構については、明瞭なレベル差を持つものや、重なりを持つものがあることから、多少の時期差は持っているものと思われる。明確な時期決定はできないが、現在使われている道路にほぼ並行して検出されていることなどから山道としてとらえてもいいのではないかと思われる。

湯舟(2)遺跡は、今回の調査では遺構も検出されず、前述したとおり図示し得るような遺物も出土しなかったため、遺跡としての性格を明確にすることはできなかった。

（笹森・斎藤）

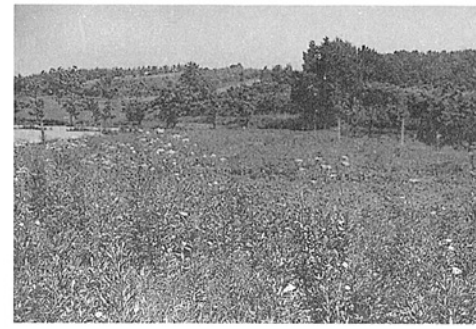
引用・参考文献

岩木山刊行会　1968　『岩木山－岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』

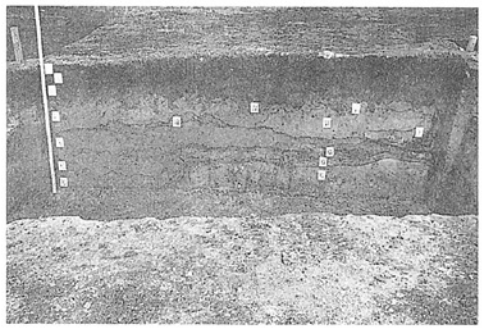
青森県教育委員会　1990　『杢沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第130集

写　真　図　版

湯舟(1)遺跡近景



湯舟(2)遺跡近景



湯舟(1)遺跡基本層序

湯舟(1)第 1 号土坑

湯舟(1)第 2 号土坑

湯舟(1)第 3 号土坑

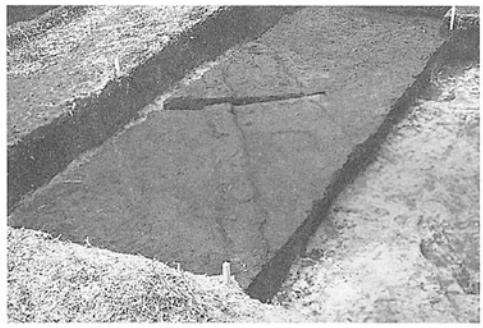
図版 1

湯舟(1)土器埋設遺構確認

湯舟(1)土器埋設遺構

湯舟(1)炭化物土坑

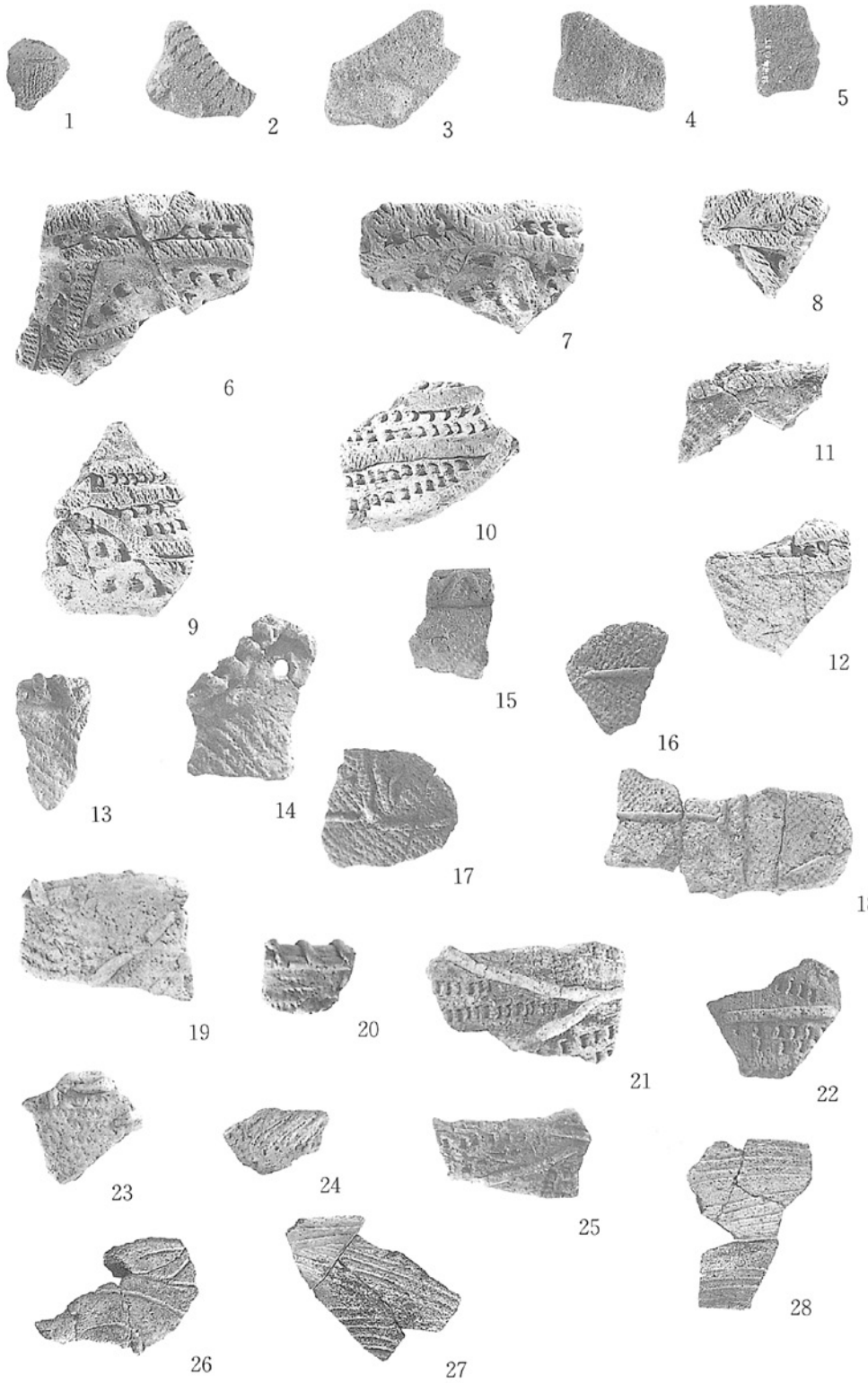
湯舟(1)道路状遺構



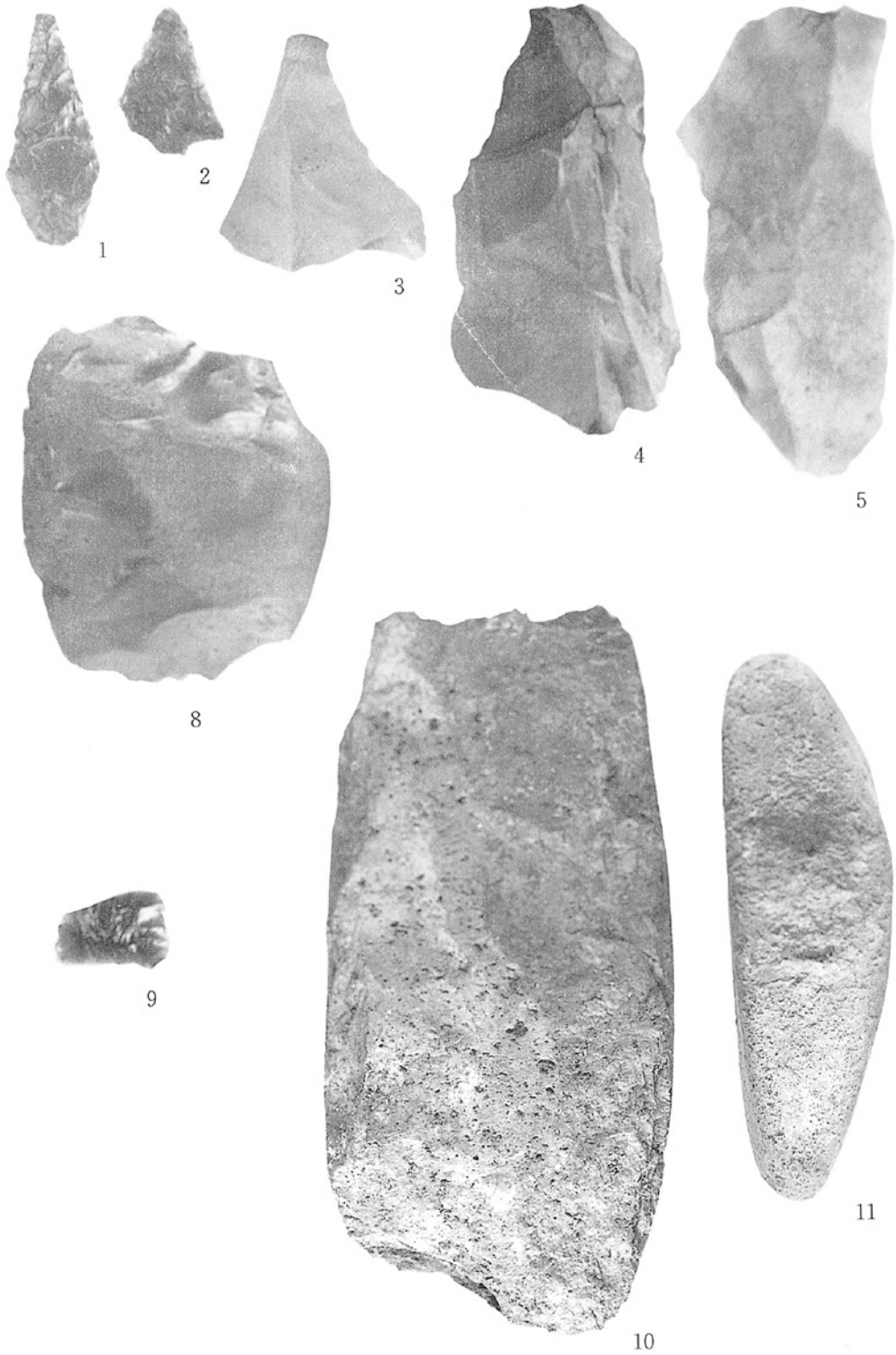
湯舟(1)道路状遺構

湯舟(2)作業風景

図版 2



図版 3　遺構外出土遺物　土器



図版 4　遺構外出土遺物　石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ゆふね　1　2　いせき
書名	湯　舟　(1)・(2)　遺　跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第175集
編著者名	笹森一朗・斎藤　岳
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038　青森市大字新城字天田内152－15　ＴＥＬ0177－88－5701
発行年月日	西暦1995年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
湯舟(ゆふね)　(1)	青森県西津軽郡鰺ケ沢町大字湯舟町字若山197外	02321	15047	40° 45′ 33″	140° 17′ 6″	19930705 ～ 19930831	2,714	津軽中部広域農道建設に係る埋蔵文化財発掘調査
湯舟(ゆふね)　(2)	青森県西津軽郡鰺ケ沢町大字湯舟町字若山220外	02321	15048	40° 45′ 18″	140° 17′ 34″	19930720 ～ 19930831	360	津軽中部広域農道建設に係る埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湯　舟　(1)		縄文時代 近世～近代	土　坑　3基 土器埋設遺構　1基 炭化物土坑　1基 道路状遺構	縄文土器 炭化物 弥生土器 石器	
湯　舟　(2)		縄文時代	—	縄文土器	

青森県埋蔵文化財調査報告書　第175集

湯舟(1)・(2)遺跡発掘調査報告書

—県営津軽中部地区広域農道整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日　平成７年３月31日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038 青森市大字新城字天田内152－15
ＴＥＬ　0177－88－5701
印 刷 所　東北印刷工業株式会社
〒030 青森市合浦一丁目２－12
ＴＥＬ　0177－42－2221